国立国語研究所学術情報リポジトリ

# 東京方言におけるアクセントの平板化：外来語複合名詞アクセントの記述



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2015-10-30<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En): Tokyo Japanese, accent, deaccentuation, unaccented pattern, linguistic factor<br>作成者: 儀利古, 幹雄, GIRIKO, Mikio<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.15084/00000473 |

国立国語研究所論集 (NINJAL Research Papers) 1: 1–19 (2011)
ISSN: 2186-134X print/2186-1358 online


# 東京方言におけるアクセントの平板化
## ——外来語複合名詞アクセントの記述——

儀利古幹雄

国立国語研究所 理論・構造研究系 プロジェクト研究員

**要旨**

本研究では，現在の東京方言における外来語複合名詞のアクセントを記述し，そこに観察されるアクセントの平板化現象に関わる言語内的要因を考察する。本研究で実施した，2 世代の東京方言話者に対するアクセント調査の結果，(i) 従来の記述と異なり，若年グループにおいて平板型複合名詞アクセントが観察されること，(ii) 話者が若年グループであっても，アクセントの平板化は，後部要素が重音節（1 音節 2 モーラ）であり語末特殊拍が撥音である場合においてのみ観察されること，以上の 2 点が主に明らかになった。

**キーワード：**アクセント，平板化，平板型，東京方言，言語内的要因

## 1. はじめに：平板型アクセントとアクセントの平板化

ピッチアクセント言語は‘obligatoriness’という観点において，ストレスアクセント言語と異なる（Hyman 2006）。obligatoriness とは，韻律語（内容語）は必ず最低一つの卓立を有さなければならないという概念である。ストレスアクセント言語が obligatoriness に対する違反を許容しない一方で，ピッチアクセント言語は韻律語においてアクセント核のない，いわゆる「無核」の状態を許容し得る。ただし，ピッチアクセント言語であればどの言語も obligatoriness に対する違反を許容するわけではない。たとえば古代ギリシャ語やサンスクリット語は，必ず内容語においてアクセント核が置かれることを必要とする。それに対しバスク語やソマリ語は，無核の韻律語を許容する言語である（Itô 2010, Mester 2010）。平板型アクセント [1] を取る語彙が多数存在する日本語は，ピッチアクセント言語の中でも後者に分類される。以上のような類型を表 1 にまとめる（✓は obligatoriness に対する違反を許容しないこと，* は違反を許容し得ることを表す）。

表 1　ピッチ／ストレスアクセント言語の類型

| | obligatoriness | 言語例 |
|---|---|---|
| ストレスアクセント | ✓ | 英語，ドイツ語，スペイン語 |
| ピッチアクセント | ✓ | サンスクリット語，古代ギリシャ語 |
| | * | バスク語，日本語 |

[1] 本研究では，音韻的側面から平板型アクセントを韻律語内にアクセント核を有さない「無核」の状態のアクセント型であると定義する。その音声的な特徴としては，急激なピッチの下降（accentual fall）を伴わず F0 曲線が極めて平坦なこと，語や句の初頭においてある程度のピッチの上昇を伴って（initial lowering）発音されるということ，以上の 2 点が挙げられる（Pierrehumbert and Beckman 1988, Kubozono 1993）。

このような観点から見ると平板型アクセントを許容することは，他言語と比較したときの際立った日本語の韻律的特徴であると言える（Kubozono 2006, etc.）。さらに，日本語の名詞の約半数は平板型アクセントであり（田中・窪薗 1999）外来語を除くとその生起頻度は 6 割強にまで増加する（柴田 1994）。このような計量的観点から見ても，平板型アクセントは日本語における顕著な韻律的特徴の 1 つと言えるだろう。

また，日本語には「平板型アクセント」そのものだけではなく「アクセントの平板化」という現象も独立して存在する。アクセントの平板化とは，本来アクセント核を有していた語彙が，何らかの言語内的要因あるいは言語外的要因によって平板型アクセントで発音されるようになる現象である。この意味でアクセントの平板化現象は, 平板型アクセントそのものと決定的に異なる。アクセント平板化現象の代表的な例として, 井上（1998）の「専門家アクセント」が挙げられる。専門家アクセントとは，ある特定の専門領域に属する話者が，その領域の専門用語およびその領域で頻繁に用いられる用語を本来のアクセント型に関わらず平板型アクセントで発音するようになるという現象である。(1) に例を示す（以下，$^0$ は平板型アクセントであること, ˥はアクセント核を示す)。

(1) a. 音楽：ドラム $^0$ < ド˥ラム ‘*drums*’，リズム $^0$ < リ˥ズム ‘*rhythm*’
b. 服飾：モデル $^0$ < モ˥デル ‘*model*’，ジャケット $^0$ < ジャ˥ケット ‘*jacket*’

このようなアクセントの平板化現象は，言語内的な要因（e.g. 韻律構造，形態構造）という観点からではなく，主に社会言語学的な観点から分析されることが多かった（秋永 1985，井上 1998，田中 2010，他)。そのため「どのような年齢層や属性の話者においてアクセントの平板化が起こりやすいか」という側面からの研究が重視され ,「どのような特性を有する語においてアクセントの平板化が起こりやすいか」という言語内的な要因を究明しようとする研究は少ない [2]。アクセントの平板化という現在も加速度的な進行を続けている言語変化――あるいは伝統的なアクセント体系の崩壊――を包括的に捉えるためには，後者のような側面からの研究も必要不可欠であることは言うまでもない。

本研究は，現在の東京方言におけるアクセントの平板化現象を分析し，その原因を言語内的な要因に帰属させる可能性を探求することを主な目的とする。具体的に扱う研究対象は，後部要素（以下, $N_2$) が外来語である複合名詞のアクセントである (e.g. デジタル + カメラ, フランス + パン，ショット + バー（以下，+ は形態素境界を表す))。このような複合名詞に観察されるアクセントの平板化を実証的・統計的なデータをもとに分析し，その背後に潜む音韻的な平板化要因を考察する。この目的を達成するために，まず 2 節でアクセントの平板化現象に関する先行研究および外来語複合名詞アクセントに関する先行研究を概観する。次いで 3 節で，東京方言話者に対して

[2] アクセントの平板化現象の言語内的要因に関する研究としては，秋永（1985）や秋永他（1991, 1992, 1993）等が挙げられる。これらの研究はアクセントの平板化の原因を，主に馴染み度（familiarity）に起因させている。しかし馴染み度という基準は個人差が大きいため，馴染み度と平板化の連関を実証的に示すことは困難であると考える。

実施したアクセント調査の概要および結果を報告し，アクセントの平板化に関わる言語内的要因を考察する。最後に 4 節で結論と今後の課題を述べ，本研究を締め括る。

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語におけるアクセントの平板化

日本語におけるアクセントの平板化現象に関する研究は少なからず存在する。それらの多くは，アクセントの平板化が首都圏在住の若年層において進行していることを報告している（田中 2010，馬瀬他 1992，他）。また，アクセントの平板化はアナウンサーにおいてさえ観察されることも指摘されている（最上 1994，他）。これらのことは，アクセントの平板化が若年層を中心として極めて広範囲に広がっている現象であることを示唆している。

前節でも述べた専門家アクセントという平板化現象については，井上（1998）以外にも，田原・新名（1998）の研究がある。この研究は，近畿地方の専門家アクセントを調査した研究は少ないことを指摘し，近畿中央部の大学生とその親世代を対象としてアクセント調査を行っている。その結果として，(i) 近畿中央部にも東京と同様に，専門家アクセントという現象が存在すること，(ii) 専門家アクセントは若年層において頻出すること，(iii) 専門家アクセントの生起傾向に性差は関与しないこと，(iv) 専門家アクセントの生起頻度と特定の語彙が所属する分野に対する話者の知識程度との間には，語彙によって正の相関が観察される場合もあれば負の相関が観察される場合もあること，以上の 4 点を主に明らかにしている。

また，アクセントの平板化を「意識型アクセント」との関連で捉えようとした研究が田中（2010）である。田中（2010）の言う意識型アクセントとは「話者が意識として持つアクセント型」を意味する。つまり，話者内の意識型アクセントの存在は，ある特定の語彙を特定のアクセント型で実際に発音するか否かは別として，そのアクセント型を聞いて許容できるか否かを基準として判断され，許容できた場合は「意識としてそのアクセント型を有する」と表現される。田中（2010）は，関東地方出身者の原則 60 歳以上の高齢層と高校生を対象として「テレビ」「ドラマ」等の外来語を用いてアクセント調査を行った。なお，高校生に対しては，読み上げ式調査と聞き取りアンケート調査の両方を行っている（高齢層は読み上げ式調査のみ）。その結果，アクセントの平板化現象は高齢層から高校生までの 2 世代の間に，東京中心部から周辺部へ急速に拡張してきた現象であることを明らかにした。またアクセント聞き取りアンケート調査の結果から田中（2010）は，意識型において平板型アクセントの許容度が高い外来語は今後一層平板化が進行するであろうと予測している。なお，今後平板化の拡張が予測される外来語の平板型アクセントには「新しい」「若者」等のイメージが付与され [3]，平板化の抑制が予測される外来語の平板型アクセントには「誤り」「方言」といったイメージが付与されたことも報告している [4]。

[3] 馬瀬他（1992）も同様に，地方都市部における外来語の平板型アクセントは，メディアを媒介として「若者」「都会」といったイメージを持って受容されていると述べている。
[4] 逆に，平板化が進行している語を起伏型アクセントで発音した場合には「古い」「田舎」等のイメージが付与されている。田中（2010）は，これらを消失に向かう言語変化を推進するイメージであると分析している。

### 2.2 外来語複合名詞アクセント

東京方言における複合名詞アクセント（以下，CA）は基本的に $N_2$ の特徴（音韻的長さおよびアクセント型）によって決定される（秋永 1985; McCawley 1968, 1978; Poser 1984, 1990）。$N_2$ が 3 モーラ以上である場合は，後部のアクセント型に基づき，規則的なアクセント型を示す。

(2) 3 モーラ／4 モーラ $N_2$ のアクセント型と CA

a. カ˥メラ → こがた + カ˥メラ（小型カメラ），デジタル + カ˥メラ
　け˥しき → ゆき + げ˥しき（雪景色），はる + げ˥しき（春景色）

b. ブレ˥ーキ → きゅう + ブレ˥ーキ（急ブレーキ），エンジン + ブレ˥ーキ
　ひこ˥うき → かみ + ひこ˥うき（紙飛行機），けい + ひこ˥うき（軽飛行機）

c. おとこ˥ → ゆき + お˥とこ（雪男），だて + お˥とこ（伊達男）
　むすめ˥ → はこいり + む˥すめ（箱入り娘），まち + む˥すめ（町娘）

d. アメリカ$^0$ → ラテン + ア˥メリカ，きた + ア˥メリカ（北アメリカ）
　おおさか$^0$ → しん + お˥おさか（新大阪），ひがし + お˥おさか（東大阪）

（2a）と（2b）はそれぞれ $N_2$ が頭高型と中高型の場合であるが，このとき $N_2$ のアクセントは複合名詞においても保持される [5]。しかし，（2c）のように $N_2$ が尾高型の場合は，$N_2$ のアクセントは複合名詞において保持されず $N_2$ の初頭音節にアクセントが付与される。（2d）のように $N_2$ が平板型である場合も同様である [6]。

一方で $N_2$ が 2 モーラ以下の場合には，3 つのタイプの CA が存在する（秋永 1985，Kubozono 1995，他）。その内，前部要素（以下，$N_1$）の初頭音節にアクセント核が付与されるもの（以下，デフォルト型 CA）が最も生産的であり，その他に $N_2$ のアクセント型が複合名詞においてもそのまま保持されるタイプ（以下, 保存型 CA）と, 複合名詞全体が無核で発音されるタイプ（以下，平板型 CA）が存在する。（3）に語例を挙げる。

(3) a. デフォルト型 CA：に˥んぎょ + ひ˥め → にんぎょ˥+ ひめ（人魚姫）

b. 保存型 CA：ペ˥ルシャ + ね˥こ → ペルシャ + ね˥こ（ペルシャ猫）

c. 平板型 CA：さくら$^0$+ いろ˥ → さくらいろ$^0$（桜色）

なお，（3）の CA 生起頻度は $N_2$ の語種によって異なる（秋永 2010）。議論を $N_1$ が 3 モーラ以上かつ $N_2$ が 2 モーラ以下の場合に限定すると [7]，東京方言において $N_2$ が和語であるときにはデフォルト型 CA，保存型 CA，平板型 CA の 3 通りが生起する。$N_2$ が漢語であるときはデフォ

[5] ただし，$N_2$ が「ロボット」のような第二音節に促音を含んでいる場合は，$N_2$ の初頭音節にアクセントが移動する場合が多い（e.g. ねこがた + ロ˥ボット（猫型ロボット））（田中 1998）。

[6] ただし，$N_2$ が「(カリ)$_F$(フォル)$_F$(ニア)$_F$（F はフットを表す）」のように 3 つの 2 モーラフット（bimoraic foot）で構成される場合は，$N_2$ のアクセント型が保持され複合名詞全体が平板型アクセントを取る（みなみ + カリフォルニア$^0$（南カリフォルニア））（窪薗・伊藤・Mester 1997）。

[7] 前部要素, 後部要素ともに 2 モーラである複合名詞は, $N_2$ に関係なく平板型 CA で発音される傾向が強い（秋永 1985, Kubozono and Fujiura 2004）。なお, 全体の語長が 4 モーラの場合に平板型アクセントが生起するのは, 複合語のみではなく単純語にも観察される傾向である。

ルト型 CA と平板型 CA の 2 通りが生起する。$N_2$ が頭高型・平板型の外来語のときは $N_2$ の初頭音節までが高く，$N_2$ が中高型のときはそのアクセントの高さの切れ目まで高いとされている。つまり秋永（2010）に従うと，東京方言において $N_2$ が外来語であるときには，原則的に保存型 CA しか生起しないことになる。

しかしその一方で，村中（1998, 1999）は，$N_2$ が 2 モーラである外来語であってもデフォルト型 CA や平板型 CA が生起すると報告している。村中（1998）は「大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM」を資料として用い，大阪方言の外来語複合名詞アクセントの実態について，東京方言アクセントと比較しつつ考察している。その研究で村中は「大阪・東京ともに，$N_2$ が 2 モーラかつ特殊拍を含まない場合は，$N_2$ の初頭音節にアクセント核が置かれるのが原則」であると述べた上で「東京方言においては，$N_2$ が 2 モーラかつ /R/，/N/（以下，/R/ は長音を，/N/ は撥音を表す）いずれかを含む場合は，$N_1$ の最終音節にアクセント核が置かれる可能性がある」と述べている。（4）と（5）に村中（1998）からの語例を示す。

（4） a. アロハ + シャ˥ツ ‘*aloha shirt*’，アンダー + シャ˥ツ ‘*undershirt*’
　　 b. スクール + バ˥ス ‘*school bus*’，マイクロ + バ˥ス ‘*minibus*’

（5） a. /R/：ダンプ˥ + カー ‘*dump truck*’，レモ˥ン + ティー ‘*lemon tea*’
　　 b. /N/：カメラ˥ + マン ‘*camera operator*’，フェルト˥ + ペン ‘*felt-tip pen*’

村中（1999）も基本的に同様の主張をしている。しかしこれらの先行研究には，調査対象とされた $N_2$ が少なく，この CA 生起傾向がどの程度一般的なものなのか把握しづらいという問題がある。また，村中（1998, 1999）におけるデータは比較的年代の古いものであり，現在の東京方言の姿を捉えたものであるとは言い難い。さらに村中（1998）は，$N_2$ が 2 モーラの外来語である複合名詞において平板型 CA が観察されるが，これは殆ど複合名詞が 4 モーラの場合であると述べている。しかし，昨今の東京方言においては語長が 4 モーラではなくても，平板型 CA で発音される複合名詞も少なからず観察される（e.g. フランス + パン $^0$，シャープ + ペン $^0$）。

以上の先行研究を総合的に勘案すると，$N_2$ が 2 モーラである外来語複合名詞のアクセントの中でも，$N_2$ が重音節 [8]（以下，H）である場合はまだ十分に記述されているとは言えない。本研究は，アクセントの平板化現象に焦点を当てその音韻的要因を考察するが，それと同時に現在の東京方言における外来語複合名詞アクセント（特に $N_2$ が 2 モーラのもの）を記述するものでもある。次節以降では独自のアクセント調査に基づき，$N_2$ が外来語である複合名詞のアクセントを世代別に記述し，アクセントの平板化の進行を考察する。

## 3. 調査

本節では，2 モーラ・3 モーラの外来語を $N_2$ として有する複合名詞のアクセントを記述し，そこに観察されるアクセントの平板化現象を音韻的観点から分析する。結果として重要なのは，

[8] 重音節とは，音節末に特殊拍（長音，撥音，促音，二重母音の第二要素）を含む，2 モーラ分の長さを有する音節のことである。音節量の概念に関しては，Allen（1973）を参照のこと。

(i) $N_2$ が 3 モーラ語および軽音節の連続である 2 モーラ語である場合，話者に関わらず平板型アクセントは生起しないこと，(ii) $N_2$ の語末特殊拍の種類が CA に決定的な影響を及ぼしていること，(iii) 若年グループにおいても $N_2$ の語末が撥音である場合にのみ平板型 CA が生起すること，以上の 3 点である。

### 3.1 調査方法

本調査で用いた $N_2$ を以下の表にまとめる（以下，L は軽音節，μ はモーラを表す）[9]。

表 2　調査で用いた $N_2$ の構造と語例

| $N_2$ モーラ長 | $N_2$ 音節構造 | 語末特殊拍 | 語例 |
|---|---|---|---|
| 3μ | L˥LL | — | カメラ ‘*camera*’，バナナ ‘*banana*’ |
| 2μ | L˥L | — | シャツ ‘*shirt*’，ハム ‘*ham*’ |
| | H(μ˥μ) | /R/ | バー ‘*bar*’，カー ‘*car*’ |
| | | /N/ | ガン ‘*gun*’，ペン ‘*pen*’ |

$N_1$ には，モーラ長が 3 モーラ・4 モーラの地名を用い，さらにそれぞれのモーラ長の語群を語末の音節構造によって 2 つに分類した。その結果，調査語彙は 16 タイプの新造複合名詞 448 語となった。なお，調査語はすべてカタカナで表記した。調査語の例を表 3 に示す（以下，L+ は $N_1$ の最終音節が L であること，H+ は $N_1$ の最終音節が H であることを示す）。

表 3　調査語例（(　) の中は語数）

| $N_2$ ＼ $N_1$ | 3μ | | 4μ | |
|---|---|---|---|---|
| | L+ | H+ | L+ | H+ |
| 3μ<br>LLL<br>(112) | シカゴカメラ<br>カナダバナナ | イランカメラ<br>ペルーバナナ | アフリカカメラ<br>ブラジルバナナ | ボストンカメラ<br>ノルウェーバナナ |
| 2μ<br>LL<br>(112) | シカゴシャツ<br>カナダハム | イランシャツ<br>ペルーハム | アフリカシャツ<br>ブラジルハム | ボストンシャツ<br>ノルウェーハム |
| 2μ<br>H[/N/]<br>(112) | シカゴパン<br>カナダペン | イランパン<br>ペルーペン | アフリカパン<br>ブラジルペン | ボストンパン<br>ノルウェーペン |
| 2μ<br>H[/R/]<br>(112) | シカゴティー<br>カナダバー | イランティー<br>ペルーバー | アフリカティー<br>ブラジルバー | ボストンティー<br>ノルウェーバー |

$N_2$ が 3 モーラおよび LL である外来語複合名詞のアクセント調査に参加したインフォーマントは，東京方言話者 23 名である [10]。その内 14 名（男性 5 名，女性 9 名）は若年グループとして

[9] 調査語の $N_2$ の選択基準は以下の通りである。(i) 3 語以上の実在する複合名詞を有する。(ii) アクセントが頭高型である。(iii) 馴染み度（定着度）が比較的高い。(iv) 普通名詞である（「ヒー」‘*he*’ のような語は除外）。

[10] この 23 名はすべて，$N_2$ が H である外来語複合名詞のアクセント調査にも参加した。$N_2$ が 3 モーラおよ

分類され，年齢は 23 歳～ 30 歳である。残りの 9 名（男性 4 名，女性 5 名）が若年グループの親世代で，年齢は 47 歳～ 50 歳である。

$N_2$ が H である外来語複合名詞のアクセント調査に参加したインフォーマントは，東京方言話者 42 名である。その内 32 名（男性 10 名，女性 22 名）は若年グループとして分類され，年齢は 23 歳～ 34 歳である。残りの 10 名（男性 4 名，女性 6 名）が若年グループの親世代で，年齢は 43 歳～ 52 歳である。

調査はすべて一対一の対面方式で行った。具体的な調査の手順は以下の通りである。まず，全調査語を無作為に並べ替えた調査語表を 2 パターン作製し，いずれかの調査語表をインフォーマントに提示して [11]，各語 2 回ずつ発音してもらった。その際，インフォーマントの発話したアクセントが 1 回目と 2 回目で異なった場合，インフォーマント自身に妥当なアクセント型を 1 つ決定してもらい，そのアクセントを聞き取りデータとして入力した（所要時間は約 30 分～ 45 分）。この調査を，$N_2$ が 3 モーラおよび LL である外来語複合名詞，$N_2$ が H である外来語複合名詞の 2 セッション行った。

### 3.2 調査結果

#### 3.2.1 $N_2$ が 3 モーラである外来語複合名詞のアクセント

まず, $N_2$ が 3 モーラである外来語複合名詞のアクセントを世代別に示す。表 4 から, $N_2$ が 3 モーラの場合，世代や $N_1$ の構造などに関わらずすべて保存型アクセントで発音されていることが見てとれる（e.g. シカゴ + カ˥メラ，ペルー + ミ˥ルク）。これは，秋永（1985）などの先行研究と同様の結果である。

表 4　$N_2$ が 3 モーラである新造複合名詞の CA 生起頻度

| | デフォルト型 CA | 保存型 CA | 平板型 CA | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 親世代 | 0<br>(0%) | 1008<br>(100%) | 0<br>(0%) | 1008<br>(100%) |
| 若年 | 0<br>(0%) | 1568<br>(100%) | 0<br>(0%) | 1568<br>(100%) |
| 計 | 0<br>(0%) | 2576<br>(100%) | 0<br>(0%) | 2576<br>(100%) |

#### 3.2.2 $N_2$ が LL である外来語複合名詞のアクセント

$N_2$ が 2 モーラで軽音節の連続（LL）である場合，複合名詞アクセントはどのような分布を示すのだろうか。表 5 にそのアクセントを世代別に示す。

び LL 構造である外来語複合名詞アクセントの調査の方が新しく開始されたものであり，インフォーマントの確保が遅れたため，両調査間でインフォーマントの数が異なっている。

[11] 調査語表は語の配列順が異なるだけである。また，インフォーマントにどちらの調査語表が提示されるかは無作為に決定された。

表 5　$N_2$ が LL 構造である新造複合名詞の CA 生起頻度

| | デフォルト型 CA | 保存型 CA | 平板型 CA | 計 |
|---|---|---|---|---|
| 親世代 | 0<br>(0%) | 1008<br>(100%) | 0<br>(0%) | 1008<br>(100%) |
| 若年 | 4<br>(0.3%) | 1564<br>(99.7%) | 0<br>(0%) | 1568<br>(100%) |
| 計 | 4<br>(0.2%) | 2572<br>(99.8%) | 0<br>(0%) | 2576<br>(100%) |

表 5 から $N_2$ が LL 構造である場合，世代や $N_1$ の構造に関わらず殆どすべてが保存型アクセントで発音されることがわかる（e.g. ロシア + ハ¬ム，アマゾン + パ¬ブ）。若年グループにおいてデフォルト型アクセントが僅かに観察されるが（e.g. カナダ¬ + ハム），若年グループとその親世代の間に統計的な有意差は観察されない（$\chi^2(1) = 1.193, p = 0.275$ (*n.s.*)）。また若年グループを対象として，$N_2$ が 3 モーラである場合（表 4）と LL 構造である場合のアクセント生起頻度を比較しても，統計的に有意な差は確認されない（$\chi^2(1) = 2.253, p = 0.133$ (*n.s.*)）。以上のことは，秋永（2010）や村中（1998, 1999）で示されている結果と同様である。

### 3.2.3 $N_2$ が H である外来語複合名詞のアクセント

まず親世代における $N_2$ の語末特殊拍と CA の生起頻度との全体的な関係を表 6 に示す（セル内最下段の値は調整済残差を表す）。

表 6　$N_2$ の語末特殊拍と CA 生起頻度（親世代）

| | デフォルト型 CA | 保存型 CA | 平板型 CA | 計 |
|---|---|---|---|---|
| /N/ | 913<br>(81.5%)<br>24.306 | 204<br>(18.2%)<br>–24.442 | 3<br>(0.3%)<br>1.733 | 1120<br>(100%) |
| /R/ | 342<br>(30.5%)<br>–24.306 | 778<br>(69.5%)<br>24.442 | 0<br>(0%)<br>–1.733 | 1120<br>(100%) |
| 計 | 1255<br>(56.0%) | 982<br>(43.8%) | 3<br>(0.1%) | 2240<br>(99.9%) |

表 6 からまず，$N_2$ の語末特殊拍が /N/ である場合にはデフォルト型 CA の生起頻度が極めて高いことがわかる。また，このときに保存型 CA が 18% ほど生起しているが，これは $N_2$ が /faN/ である場合にほぼ限られる（付録 [12]）。一方で，$N_2$ の語末特殊拍が /R/ である場合は保存型 CA の生起が優勢であり，それに次いでデフォルト型 CA が出現しやすい傾向にある。そして，語末特殊拍の種類に関係なく平板型 CA はほぼ生起しない。なお，表 6 に対してカイ二乗検定をかけたところ，統計的な有意差が確認されている（$\chi^2(2) = 598.309, p < .001$）。以上の結果は，外来語複合名詞の $N_2$ が H である場合にデフォルト型 CA が生起する可能性があると言及した村中

[12] 付録の図から，$N_2$ によって保存型 CA 生起頻度が異なっていることがわかる。この $N_2$ 間の違いが何に起因するものなのかは，今後の課題にしたい。

（1998, 1999）と基本的に同様のものである。ただし，語末特殊拍の種類によってそれぞれの CA の生起頻度に偏りが見られることは，村中（1998, 1999）などの先行研究で明らかにされていなかったものである。

次に，モーラ長および音節構造と CA 生起頻度との関係を図 1 と図 2 に示す。

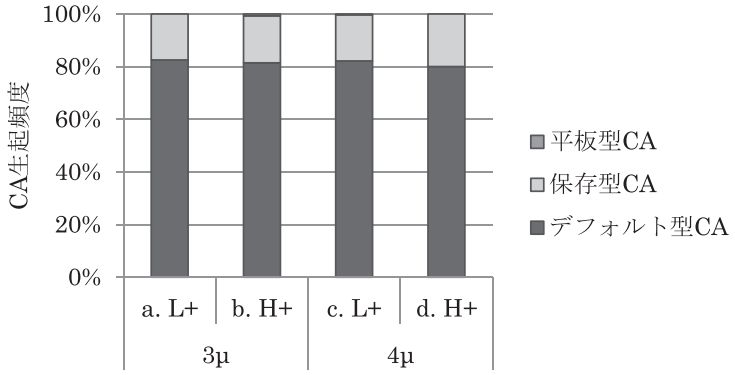


図 1　モーラ長，音節構造と CA 生起頻度（親世代（語末が /N/ の場合））

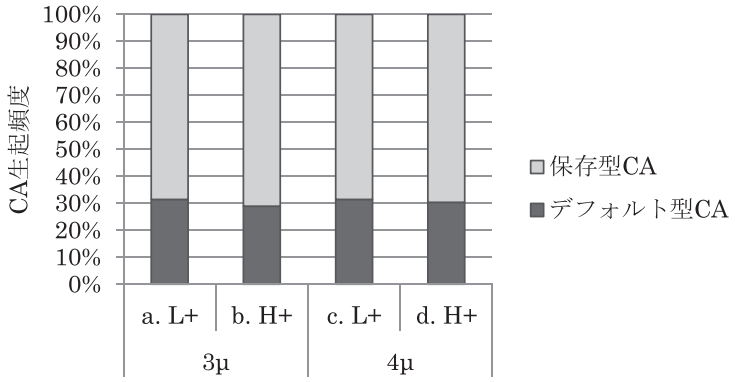


図 2　モーラ長，音節構造と CA 生起頻度（親世代（語末が /R/ の場合））

まず，$N_1$ のモーラ長という観点から CA 生起頻度を比較する。図 1a と図 1c の比較から，$N_2$ の語末が /N/ であり $N_1$ の語末が軽音節であるとき，モーラ長によって CA 生起頻度が有意に異なることはないことがわかる（$\chi^2$ (2) = 1.002, $p$ = .606 (*n.s.*)）。図 1b と図 1d の比較（$N_2$ の語末が /N/ であり $N_1$ の語末が重音節であるとき），図 2a と図 2c の比較（$N_2$ の語末が /R/ であり $N_1$ の語末が軽音節であるとき），図 2b と図 2d の比較（$N_2$ の語末が /R/ であり $N_1$ の語末が重音節であるとき）からも，同様のことが言える（それぞれの統計値は以下の通りである。$\chi^2$ (2) = 2.375, $p$ = .305 (*n.s.*) / $\chi^2$ (1) = 0.008, $p$ = .927 (*n.s.*) / $\chi^2$ (2) = 0.077, $p$ = .781 (*n.s.*)）。以上のことは，$N_1$ のモーラ長が CA 生起頻度に影響を及ぼさないことを示している。

また，$N_1$ の音節構造は CA 生起頻度に影響を及ぼすだろうか。図 1a と図 1b の比較から，$N_2$ の語末が /N/ であり $N_1$ が 3 モーラである場合には，CA 生起頻度に有意な差は認められない（$\chi^2$

(2) = 2.030, $p$ = .362 (*n.s.*))。このことは，図 1c と図 1d の比較（$N_2$ の語末が /N/ であり $N_1$ が 4 モーラの場合）においても同様である（$\chi^2$ (2) = 1.546, $p$ = .462 (*n.s.*))。また，図 2a と図 2b の比較（$N_2$ の語末が /R/ であり $N_1$ が 3 モーラの場合）からも，CA 生起頻度の統計的な差異は認められない（$\chi^2$ (1) = .305, $p$ = .581 (*n.s.*))。図 2c と図 2d の比較（$N_2$ の語末が /R/ であり $N_1$ が 4 モーラの場合）においても同様である（$\chi^2$ (1) = .033, $p$ = .855 (*n.s.*))。以上の統計的な事実は，$N_1$ の音節構造も，CA の決定および CA 生起頻度に影響を与えないことを示している。

次に，若年グループに対して実施したアクセント調査の結果を提示していく。まず，$N_2$ の語末特殊拍と CA の生起頻度との全体的な関係を表 7 に示す（セル内最下段の値は調整済残差を表す）。

表 7　$N_2$ の語末特殊拍と CA 生起頻度（若年グループ）

| | デフォルト型 CA | 保存型 CA | 平板型 CA | 計 |
|---|---|---|---|---|
| /N/ | 2509<br>(70.0%)<br>20.029 | 565<br>(15.8%)<br>–33.412 | 510<br>(14.2%)<br>23.365 | 3584<br>(100%) |
| /R/ | 1673<br>(46.7%)<br>–20.029 | 1910<br>(53.3%)<br>33.412 | 1<br>(0%)<br>–23.365 | 3584<br>(100%) |
| 計 | 4182<br>(58.3%) | 2475<br>(34.5%) | 511<br>(7.1%) | 7168<br>(99.9%) |

表 7 からまず，$N_2$ の語末特殊拍が /N/ である場合，デフォルト型 CA の生起頻度が極めて高いことが見てとれる。また，このときに保存型 CA が 15% ほど生起しているが，これは $N_2$ が /faN/ である場合にほぼ限られる（付録 [13]）。その一方で $N_2$ の語末特殊拍が /R/ である場合は，保存型 CA の生起が若干優勢であり，これに次いでデフォルト型 CA が出現する。

$N_2$ の語末特殊拍が /R/ である場合と /N/ である場合の最も顕著な相違点の 1 つが，平板型 CA の生起傾向である。$N_2$ の語末が /R/ である場合には平板型 CA は生起しないが，$N_2$ の語末が /N/ である場合には 14% 強生起する。この事実は，秋永（1985）や秋永（2010）などで明示されていなかったものであり，村中（1998, 1999）の記述にもなかったものである。この点に関してさらに重要なのが，$N_2$ の語末が /N/ であっても，親世代では平板型 CA がほぼ観察されなかったことである。4 節で詳細に考察するが，この事実は，従来起伏型アクセントで発音されていた外来語複合名詞が平板型 CA で発音されるようになるというアクセント変化（アクセントの平板化）を示している。なお表 7 に対してカイ二乗検定をかけたところ，統計的な有意差が確認されている（$\chi^2$ (2) = 1405.047, $p$ < .001）。

次に，モーラ長および音節構造と CA 生起頻度との関係を図 3 と図 4 に示す。

[13] 付録の図から，$N_2$ によって平板型 CA 生起頻度が異なっていることがわかる。この $N_2$ 間の違いが何に起因するものなのかは，今後の課題にしたい。

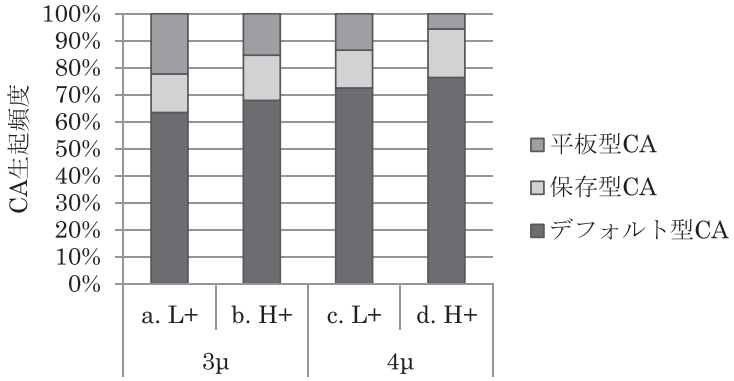


図 3　モーラ長，音節構造と CA 生起頻度（若年グループ（語末が /N/ の場合））

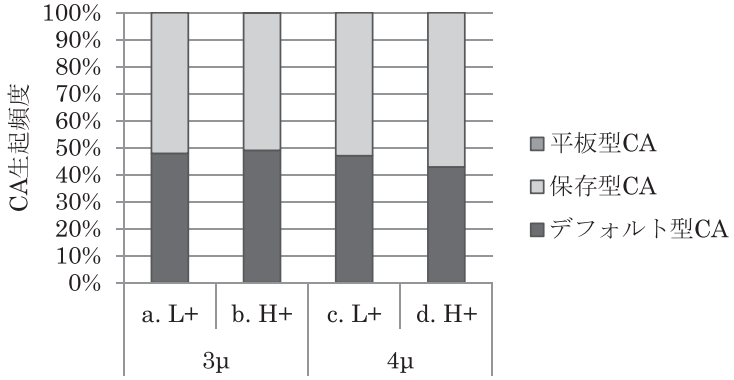


図 4　モーラ長，音節構造と CA 生起頻度（若年グループ（語末が /R/ の場合））

まず，$N_1$ のモーラ長という観点から CA 生起頻度を比較する。図 3a と図 3c の比較から，$N_2$ の語末が /N/ であり $N_1$ の語末が軽音節であるときは，モーラ長による CA 生起頻度の差異が観察できる（$\chi^2$ (2) = 24.849, $p$ < .001）。同様に図 3b と図 3d の比較（$N_2$ の語末が /N/ であり $N_1$ の語末が重音節である場合）からも，モーラ長による CA 生起頻度の有意な差異が観察できる（$\chi^2$ (2) = 44.907, $p$ < .001）。その一方で，図 4a と図 4c の比較（$N_2$ の語末が /R/ であり $N_1$ の語末が軽音節であるとき）からは，CA 生起頻度の差が観察されない（$\chi^2$ (1) = .110, $p$ = .741 (*n.s.*)）。このことは図 4b と図 4d の比較（$N_2$ の語末が /R/ であり $N_1$ の語末が重音節の場合）においても同様である（$\chi^2$ (2) = .290, $p$ = .590 (*n.s.*)）。以上のことは，$N_1$ のモーラ長が CA 生起頻度に与える影響は極めて限定的であることを示唆している [14]。

次に，$N_1$ の音節構造という観点から CA 生起頻度を比較する。図 3a と図 3b の比較から，$N_1$

[14] 図 1b と図 1c を比較した場合には統計的な有意差は確認されなかったが（$\chi^2$ (2) = 4.540, $p$ = 0.103 (*n.s.*)），図 1a と図 1d を比較した場合には有意差が確認された（$\chi^2$ (2) = 102.966, $p$ < .001）。このことから，デフォルト型 CA の生起頻度が最も高いのは，$N_1$ が 4 モーラで語末が H である場合であり，最も低いのは $N_1$ が 3 モーラで語末が L の場合であるということが理解できる。

が重音節で終わる場合は軽音節で終わる場合と比べて，デフォルト型 CA 生起頻度が若干高くなることが見てとれる（$\chi^2$ (2) = 14.474, $p$ < .01）。また図 3c と図 3d の比較からも，同様の傾向が観察できる（$\chi^2$ (2) = 33.676, $p$ < .001）[15]。その一方で，図 4a と図 4b の比較からは，CA 生起頻度の統計的な差異は認められない（$\chi^2$ (2) = 1.246, $p$ = .079 (*n.s.*)）。これは図 4c と図 4d の比較においても同様である（$\chi^2$ (1) = 3.088, $p$ = .110 (*n.s.*)）。以上の統計的な事実は，$N_1$ の音節構造が CA 生起頻度に与える影響が極めて限定的であることを示している。

## 4. 考察

以上，外来語を $N_2$ として有する新造複合名詞を用いたアクセント調査の結果を報告した。本節ではまず，アクセントの平板化について考察する前に現在の東京方言における外来語複合名詞のアクセントについてまとめておきたい。前節の調査結果を表 8 にまとめる（表 8 では，◎は優勢であること，○は生起傾向にあること，△は生起するが生起傾向が小さいこと，×は（一部例外を除いて）生起しないことを意味する）。

表 8　アクセント調査のまとめ

| | | | デフォルト型 CA | 保存型 CA | 平板型 CA |
|---|---|---|---|---|---|
| | 3μ | 親世代 | × | ◎ | × |
| | | 若年 | × | ◎ | × |
| | | e.g. | カナダ˥＋カメラ | カナダ＋カ˥メラ | カナダ＋カメラ⁰ |
| 2μ | LL | 親世代 | × | ◎ | × |
| | | 若年 | × | ◎ | × |
| | | e.g. | カナダ˥＋パブ | カナダ＋パ˥ブ | カナダ＋パブ⁰ |
| | H[/N/] | 親世代 | ◎ | × | × |
| | | 若年 | ◎ | × | △ |
| | | e.g. | カナダ˥＋パン | カナダ＋パ˥ン | カナダ＋パン⁰ |
| | H[/R/] | 親世代 | ○ | ◎ | × |
| | | 若年 | ○ | ○ | × |
| | | e.g. | カナダ˥＋バー | カナダ＋バ˥ー | カナダ＋バー⁰ |

まず表 8 から，$N_2$ が 3 モーラおよび LL 構造である場合には保存型 CA の生起頻度が圧倒的に高く，他のアクセント型は生起しないことがわかる。この傾向は世代によって異なることはない。その一方で $N_2$ が H 構造である場合には，$N_2$ の語末が /N/ であれば圧倒的にデフォルト型 CA が生起するが，/R/ であれば保存型 CA とデフォルト型 CA の両方が生起する。このこともまた世代を超えて言える。つまり，語末特殊拍の種類が，$N_2$ が H である外来語複合名詞のアクセントに大きく関与する。$N_2$ が 3 モーラおよび LL 構造である場合に観察される CA の生起傾向は，秋永（1985, 2001）などの先行研究と同様である。しかし $N_2$ が重音節の場合に，世代を

[15] $N_1$ の語末が H である場合にデフォルト型 CA 生起頻度が高くなる（平板型 CA 生起頻度が低くなる）ことは，H がアクセント核を引き付けやすいことによると考えられる（Prince and Smolensky 2004）。

問わず語末特殊拍の種類によって CA 生起頻度の偏りが見られることは，先行研究では明示されていなかった結果である。

次に, CA 生起に関する世代間の相違点を考察する。表 8 から明らかになる親世代と若年グループの相違点は，(i) $N_2$ の語末特殊拍が /R/ である場合に，親世代の方が若年グループよりも保存型 CA の生起頻度が高いこと（$\chi^2$ (2) = 91.287, $p$ < .001），(ii) $N_2$ の語末特殊拍が /N/ である場合に，若年グループにおいてのみ平板型 CA が生起すること（$\chi^2$ (2) = 171.213, $p$ < .001），以上の 2 点である。親世代で保存型 CA の生起頻度が高いことは，調整済残差からも明らかである（親世代の保存型 CA 生起頻度：$Z$ = 9.546）。同様に，若年グループで平板型 CA 生起頻度が有意に高いことも言える（若年グループの平板型 CA 生起頻度：$Z$ = 13.085）。以上の統計的事実は，先行研究では明らかにされていなかったものである。

ここで，アクセント変化の方向性について考えてみたい。$N_2$ の語末が /R/ である場合について親世代と比較すると，若年グループではデフォルト型 CA の生起頻度が高く，保存型 CA の生起頻度が低い。また，平板型 CA は両世代において観察されない。これらのことは，親世代から若年世代に至るまでに保存型 CA がデフォルト型 CA へと変化してきていることを示している。なお, この変化は既に $N_2$ が和語である複合名詞で観察されている（にわかあ˥め → にわか˥あめ（にわか雨），ペルシャね˥こ → ペルシャ˥ねこ（ペルシャ猫））（Kubozono 1997, etc.）。前述した $N_2$ の語末が /R/ である外来語複合名詞アクセントの変化が，和語複合名詞アクセントの変化と同じ流れにあることは興味深い事実である。

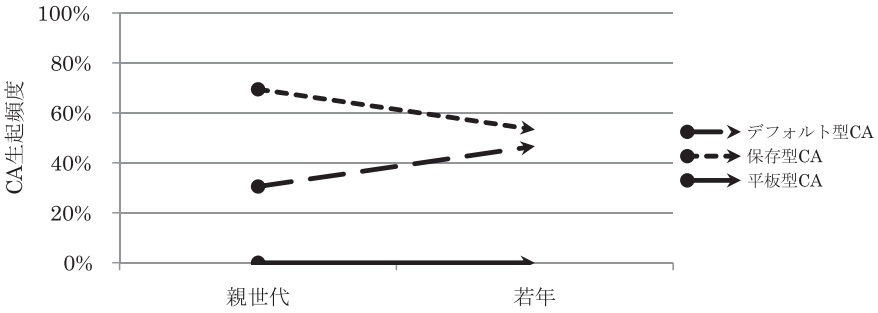


図 5　$N_2$ の語末が /R/ である外来語複合名詞における CA 生起頻度の世代間推移

一方，$N_2$ の語末が /N/ である場合について親世代と比較すると，若年グループではデフォルト型 CA の生起頻度が減少している一方で, 保存型 CA の生起頻度はほぼ変わらない（若年グループの保存型 CA 生起頻度：$Z$ = –1.935，親世代の保存型 CA 生起頻度：$Z$ = 1.935）。また，親世代から若年グループにかけて平板型 CA の生起頻度が増加している。これらのことから，親世代から若年世代に至るまでにデフォルト型 CA が平板型 CA へと変化してきていると分析できる。

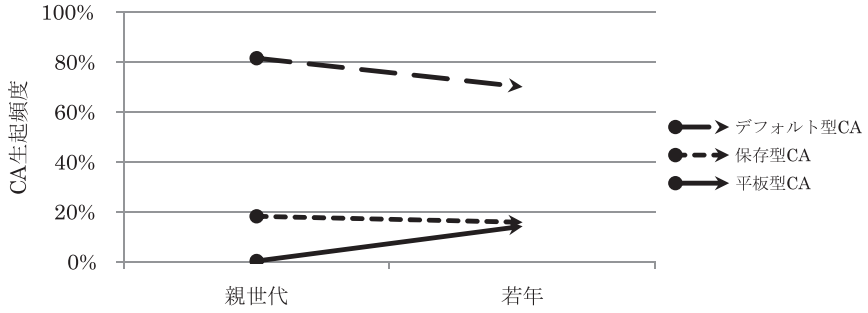


図 6　$N_2$ の語末が /N/ である外来語複合名詞における CA 生起頻度の世代間推移

以上の世代間の CA 生起頻度の比較および考察から，$N_2$ の語末が /R/ である外来語複合名詞では，保存型 CA からデフォルト型 CA へアクセントが変化していて，$N_2$ の語末が /N/ である外来語複合名詞では，デフォルト型 CA から平板型 CA へとアクセント変化が起こっていると言える。後者がアクセントの平板化現象に該当する。しかし，このアクセント変化は若年グループの発話でも，$N_2$ の語末が /N/ である場合にのみ観察され，語末が /R/ の外来語複合名詞においては決して起こらない。この $N_2$ の語末特殊拍の相違が，アクセントの平板化現象を引き起こす（または抑止する）音韻的要因（言語内的要因）である。$N_2$ が H である外来語複合名詞に見られるアクセントの平板化現象は，話者の世代という言語外的な要因によってのみ生じるのではなく，$N_2$ の語末特殊拍の種別という言語内的な要因も相まって生じるのである。

本研究で明らかになったことを以下にまとめる。

(6)　現在の東京方言における外来語複合名詞アクセント

a.　$N_2$ が LLL 構造である場合，保存型 CA となる。

b.　$N_2$ が LL 構造である場合，保存型 CA となる。

c.　$N_2$ が H であり語末特殊拍が /R/ の場合，親世代では保存型 CA 生起が優勢であり，若年グループでは保存型 CA とデフォルト型 CA がほぼ同程度観察される。

d.　$N_2$ が H であり語末特殊拍が /N/ の場合，（一部例外を除いて）世代を問わずデフォルト型 CA となる。

e.　$N_2$ が H であり語末特殊拍が /N/ の場合，若年グループにおいてのみ平板型 CA が生起することがある。

(7)　アクセントの平板化に関わる言語内的要因（外来語複合名詞）

a.　$N_2$ の音韻的長さが 2 モーラである。つまり $N_2$ が 3 モーラである場合，平板化は生じない。

b.　$N_2$ が H 構造である。つまり $N_2$ が LL 構造である場合，(7a) を満たしていても平板化は生じない。

c.　$N_2$ の語末特殊拍が /N/ である。つまり $N_2$ の語末特殊拍が /R/ である場合，(7a)，(7b) を満たしていても平板化は起こらない。

## 5. 結論

本研究では独自のアクセント調査により，現在の東京方言の外来語複合名詞のアクセントを記述し，そこに観察されるアクセントの平板化現象の言語内的要因を考察した。その結果，（6）および（7）に挙げたことを明らかにした。

ここで，なぜ語末が /N/ であるときに（若年グループにおいて）平板型アクセントが生起する一方で，/R/ である場合には生起しないのかということが問題となる。これに関しては今後の課題としたいが，この現象は他の音韻現象においても観察されることを強調しておきたい。4 モーラの外来語は平板型アクセントで発音される傾向が強いが，LLH 構造の語がそれに当てはまらないことはよく知られている（Kubozono 1996，他）。これに対し田中（2008）は，LLH 構造であっても全く平板型アクセントが生起しないわけではなく，その生起頻度は語末特殊拍の種類によって異なると主張した上で，語末特殊拍が /N/ である場合には /R/ である場合と比較して平板型アクセント生起頻度が高いことを指摘している [16]。田中（2008）と本研究は，分析対象が 4 モーラ外来語単純名詞か 5 モーラ以上の外来語複合名詞かという点で異なる。しかし両者は，語末特殊拍の種類が生成されるアクセントに影響を及ぼすこと，そして語末が /N/ である場合に平板型アクセントが生起する傾向が強いこと，以上の 2 点において共通している。即ち，本研究で明らかになったアクセントの平板化に関わる音韻的要因は，より一般的な現象の中に位置付けることが可能である。

（8） 4 モーラ外来語における語末特殊拍の種類とアクセント

a. エ˥ナジー ‘*energy*’，ピ˥クチャー ‘*picture*’，タ˥クシー ‘*taxi*’，シ˥ナジー ‘*synergy*’，レ˥クチャー ‘*lecture*’，ポ˥スター ‘*poster*’

b. ギロチン $^{0}$ ‘*guillotine*’，オルガン $^{0}$ ‘*organ*’，バチカン $^{0}$ ‘*Vatican*’，ペリカン $^{0}$ ‘*pelican*’，マネキン $^{0}$ ‘*mannequin*’，マラソン $^{0}$ ‘*marathon*’

今後の課題としては以下の 3 点を挙げておきたい。まず，より幅広い構造の外来語複合名詞を調査対象とすることである。今回は $N_1$ のモーラ長を 3･4 モーラに，$N_2$ の音節構造を LLL 構造，LL 構造，H 構造に限って調査を実施した。しかし，現在の東京方言における外来語複合名詞アクセントを網羅的に記述するためには，HL 構造や LH 構造，または 4 モーラの $N_2$ を用いたアクセント調査や，5 モーラ以上の $N_1$ を用いたアクセント調査も必要となる。2 点目の課題としては，$N_2$ に無意味語を用いた無意味語発話実験を実施することが挙げられる。今回は実在語を用いてアクセント調査を実施したが，実在語だけでは語数が限られることが問題となる。そのため，今回の主張をさらに一般性の高いものにするために無意味語を用いた発話実験が必要となる。3 点目としては，和語や漢語を $N_2$ とする複合名詞のアクセント調査が挙げられる。今回と同様に，音韻的に制御した新造漢語／和語複合名詞を作成しアクセント調査を行い，その結果を外来語複

[16] 田中（2008）は，HLH 構造の外来語でも，語末が /N/ である場合は /R/ のときと比べて平板型アクセントの生起頻度が高いと報告している。

合名詞の場合と比較することが最も重要な課題であると考える。そこで焦点を当てるのは，漢語／和語複合名詞においてもアクセントの平板化が観察されるのか，またはどのような言語内的要因が漢語／和語複合名詞アクセントの平板化に関わっており，それが今回観察されたものとどのような異同を示すのかという問題である。

## 参　照　文　献


秋永一枝（1985）「共通語のアクセント」NHK（編）『日本語発音アクセント辞典』巻末付録．東京：日本放送協会出版.

秋永一枝（2010）「アクセント習得法則」秋永一枝（編）『新明解日本語アクセント辞典 CD 付き』巻末付録．東京：三省堂.

秋永一枝・田中ゆかり・福田三恵子・吉田健二・松永修一（1991）「東京方言における語彙の使用度とアクセント等発音との関係（中間報告）」『東京語音声の諸相（1）』1–18. 『日本語音声』研究成果刊行書.

秋永一枝・田中ゆかり・松永修一（1992）「言葉の馴染み度と辞書記載アクセント（承前）」『東京語音声の諸相（2）』34–87. 『日本語音声』研究成果刊行書.

秋永一枝・田中ゆかり・松永修一（1993）「言葉の馴染み度と発音」『東京語音声の諸相（3）』1–51. 『日本語音声』研究成果刊行書.

Allen, William Sydney (1973) *Accent and rhythm*. Cambridge: Cambridge University Press.

Hyman, Larry M. (2006) Word-prosodic typology. *Phonology* 23: 225–257.

井上史雄（1998）『日本語ウォッチング』東京：岩波書店.

Itô, Junko (2010) Unaccentedness and the perfect prosodic word. Presented at Biwako Phonology Festa (February 18, 2010).

Kubozono, Haruo (1993) *The organization of Japanese prosody*. Tokyo: Kurosio Publisher.

Kubozono, Haruo (1995) Constraint interaction in Japanese phonology: Evidence from compound accent. *Phonology at Santa Cruz* 4: 21–38. University of California at Santa Cruz.

Kubozono, Haruo (1996) Syllable and accent in Japanese: Evidence from loanword accentuation. *The Bulletin* (Phonetic Society of Japan) 211: 71–82.

Kubozono, Haruo (1997) Lexical markedness and variation: A nonderivational account of Japanese compound accent. *WCCFL* 15: 273–287.

Kubozono, Haruo (2006) Where does loanword prosody come from?: A case study of Japanese loanword accent. *Lingua* 116: 1140–1170.

Kubozono, Haruo and Yayoi Fujiura (2004) Morpheme-dependent nature of compound accent in Japanese. *Phonological Studies* 7: 9–16.

窪薗晴夫・伊藤順子・Armin Mester（1997）「音韻構造から見た語と句の境界：複合名詞アクセントの分析」音声文法研究会（編）『文法と音声』147–166．東京：くろしお出版.

馬瀬良雄・沢木幹栄・伊藤祥子・柳真弓・清水千寿子・安平美奈子・竹内祥子・藤森あき・古畑陽子（1992）「放送音声の地域言語に与える影響と標準語教育」『東京語音声の諸相（2）』1–33. 『日本語音声』研究成果刊行書.

McCawley, James D. (1968) *The phonological component of a grammar of Japanese*. The Hague: Mouton.

McCawley, James D. (1978) What is a tone language? In: Victoria Fromkin (ed.) *Tone: A linguistic survey*, 113–131. New York: Academic Press.

Mester, Armin (2010) On the sources of (un)accentedness. Presented at 322nd regular meeting of the Phonetic Society of Japan (PSJ) (December 11, 2010).

村中淑子（1998）「外来語を後部要素とする複合名詞のアクセントについて―杉藤美代子著「大阪・東京アクセント音声辞典 CD-ROM」を用いて―」『日本語研究センター報告』5: 77–92．大阪樟蔭女子大学日本語研究センター.

村中淑子（1999）「大阪方言における複合名詞アクセントの実態について」『言語文化研究』6: 277–298．徳島大学総合科学部.

最上勝也（1994）「放送のことばとアクセント―外来語アクセントの平板化を例に―」『日本語学』13(5): 73–83.

Pierrehumbert, Janet and Mary Beckman (1988) *Japanese tone structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
Poser, William J. (1984) The phonetics and phonology of tone and intonation in Japanese. Doctoral dissertation, MIT.
Poser, William J. (1990) Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66: 78–105.
Prince, Alan and Paul Smolensky (2004) *Optimality theory: Constraint interaction in generative grammar*. Oxford: Blackwell.
柴田武（1994）「外来語におけるアクセント核の位置」佐藤喜代治（編）『現代語･方言の研究』388–418. 東京：明治書院.
田原広史・新名由香（1998）「近畿中央部における専門家アクセントの実態（その 1）」『日本語教育センター報告』5: 45–76. 大阪樟蔭女子大学日本語研究センター.
田中真一（1998）「四次元ポケットと猫型ロボットのアクセント―促音がアクセントに及ぼす影響―」『日本音声学会第 12 回全国大会予稿集』91–96.
田中真一（2008）『リズム・アクセントの「ゆれ」と音韻・形態構造』東京：くろしお出版.
田中真一・窪薗晴夫（1999）『日本語の発音教室―理論と練習―』東京：くろしお出版.
田中ゆかり（2010）『首都圏における言語動態の研究』東京：笠間書院.

## 付　録

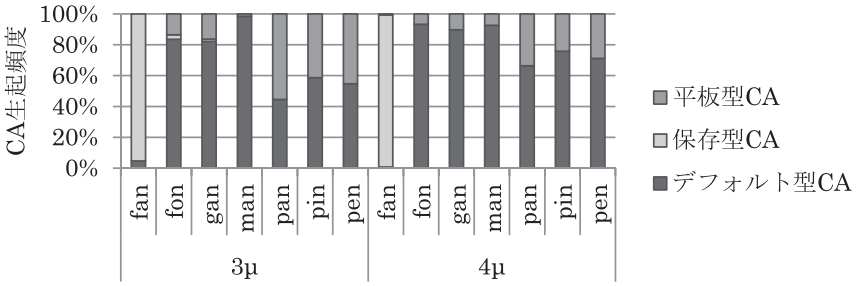


図 7　若年グループにおける語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /N/ で $N_1$ の最終音節が L の場合）

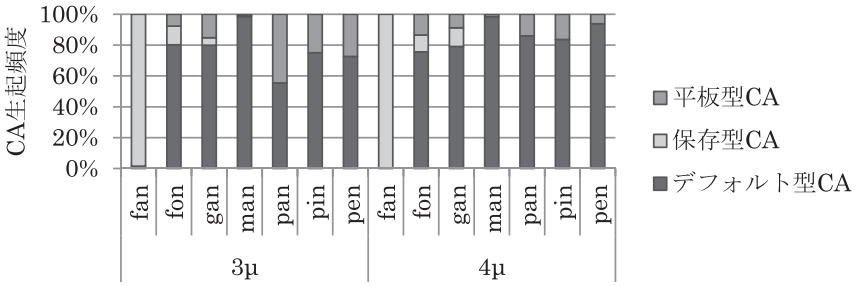


図 8　若年グループにおける語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /N/ で $N_1$ の最終音節が H の場合）

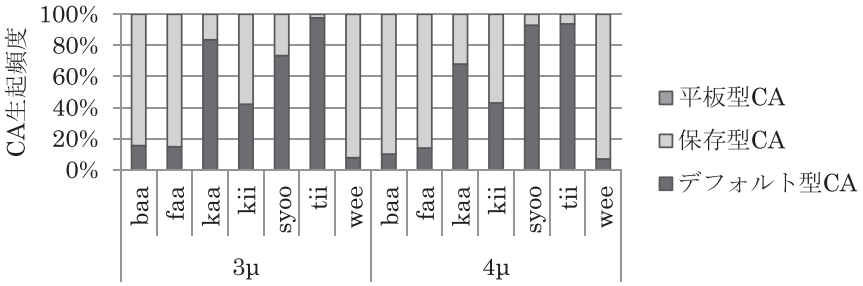


図 9　若年グループにおける語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /R/ で $N_1$ の最終音節が L の場合）

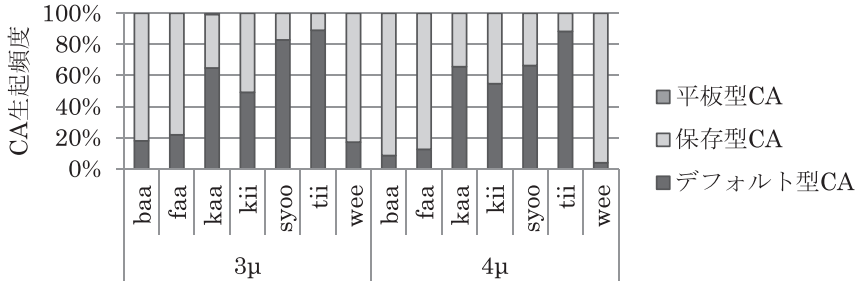


図 10　若年グループにおける語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /R/ で $N_1$ の最終音節が H の場合）

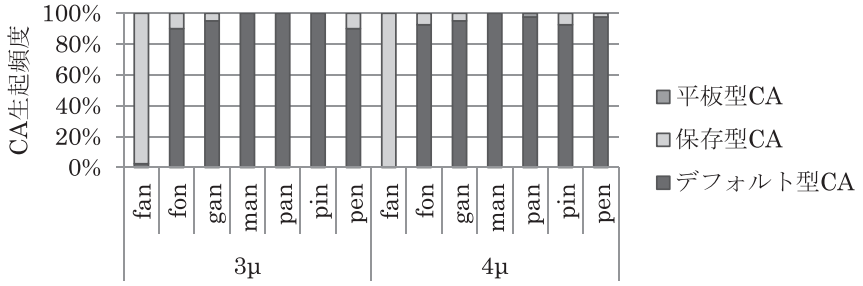


図 11　親世代における語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /N/ で $N_1$ の最終音節が L の場合）

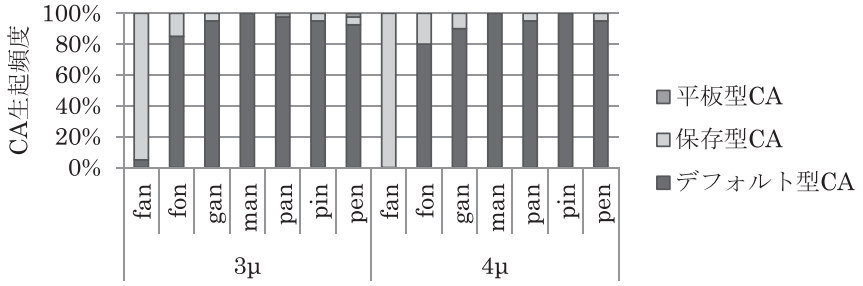


図 12　親世代における語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /N/ で $N_1$ の最終音節が H の場合）

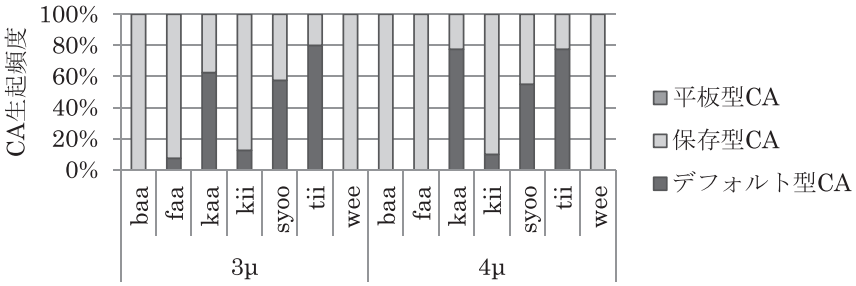


図 13　親世代における語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /R/ で $N_1$ の最終音節が L の場合）

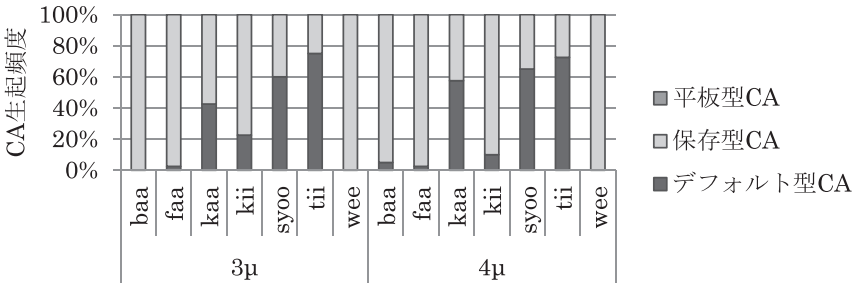


図 14　親世代における語別 CA 生起頻度
（$N_2$ の語末が /R/ で $N_1$ の最終音節が H の場合）

# Deaccentuation in Tokyo Japanese: A Descriptive Study of Loanword Compound Accent

GIRIKO Mikio

Postdoctoral Research Fellow, Department of Linguistic Theory and Structure,
National Institute for Japanese Language and Linguistics

**Abstract**
The aims of this paper are twofold. First, I describe accentuation in compounds containing a loanword in contemporary Tokyo Japanese. I then focus on deaccentuation and explore the internal (i.e., linguistic) factors involved in this phenomenon. By comparing younger and older speakers, I argue against the view in the literature that the unaccented pattern does not occur in loanword compounds; I show that younger speakers do in fact use the unaccented pattern in this type of word, too. However, they do so only in a certain environment, i.e., when the final morpheme of the compound consists of one heavy syllable containing the moraic nasal /N/ (e.g., /peN/ 'pen').

**Key words**: Tokyo Japanese, accent, deaccentuation, unaccented pattern, linguistic factor